

西田哲学会会報

創刊号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局

〒九二九-1126

石川県河北郡宇ノ気町内日角

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

巻頭言

西田哲学会会長 上田閑照

西田幾多郎が人生の悲哀と歴史の苦難のなか思索の難路を歩み通し、七十五歳でこの世を去って半世紀をこえた。四十歳にして「我死なば故郷の山に埋れて昔語りし友を夢みむ」と詠った西田は、死して未来の友にも語りかけてくる。機が熟して生まれた西田哲学会はその場所と言える。私たちは西田から何を

のように聞くか。
「世界がリアルになりつつある現在」と西田が言った世界は、人類史において巨時代的に深刻な、破壊すら予感されるほどの転期にある。現代世界の体制を造ってきた根本の考え方に對して、西田哲学は別の発想の可能性を示唆している。「実体」に代わって「場所」を、同一律の

基礎に「矛盾的自己同一」を、「主観・客観」図式に代わって「主客相反するものの主客未分のところからの統一」を、理性と感性の峻別ではなく、感性のなかに理性を。西田哲学会がどのように有意義に育ってゆくか、課題は大きい。

第一回年次大会報告

西田哲学会の第一回年次大会が、平成十五年六月七日(土)、八日(日)の両日にわたり、京大会館(京都市左京区)で開催された。天候にもめぐまれ、両日とも二百名ほどの多数の会員が参加した。

西田の命日でもある六月七日は、上田閑照会長(京都大学名

誉教授)による開会の挨拶に続いて、大峯顯氏(大阪大学名誉教授)「哲学と宗教」と安藤忠雄氏(建築家)「西田幾多郎記念哲学館を通して考える」の二つの講演が行われた。大峯氏は「心霊上の事実」としての宗教を論理により説明しようとした西田哲学の意義を強調。安藤氏

は「考えるための空間造り」という建築理念をスライドを通して説明された。

翌八日は、午前中A会場(二一〇室)で二人の若手研究者による発表が行われた。水野友晴氏(大阪外国語大学)「西周と西田幾多郎―明治日本哲学の一潮流の考察」は、『善の研究』への儒教の強い影響を指摘。白井雅人氏(上智大学)「私と汝の諸相―「私と汝」及び「弁証



哲学入門講座「生涯と著作」が開かれ、「或教授の退職の辞」(『統思索と体験』所収)をもとに西田の生涯を概観した後、『善の研究』の構造と基本的立場を解説。三十名を超える参加者が熱心に聴き入った。

午後からは有坂陽子氏(サンフランシスコ大学)、Agustín Jacinto Zavala氏(メ

法的に一般者としての「世界」から」は、西田における「他者」論を宗教論まで含めて考察。B会場(二一〇室)では、秋富克哉氏(京都工芸繊維大学)、小林信之氏(京都市立芸術大学)、美濃部仁氏(明治大学)による西田

キシコ・ミチョアカン大学院大学)により、海外における西田哲学の活発な研究状況が報告された。その後、大橋良介副会長(大阪大学)の司会によりシンポジウム「西田哲学の場所」が開かれた。小坂国継氏(日本大学)は西田哲学の核心を東西思想との関わりの中で簡潔に要約した上で、環境倫理としての可能性も示



唆。田中裕氏(上智大学)は西田の「制作」論にみられる「創造」の意義について連歌を例にして考察。藤田正勝氏(京都大学)は「哲学的対話の場」において西田を問題にすることの必要性を強調。三氏の興味深い発表に触発され、A会員からも多くの熱心な質問が出された。最後に大橋副会長より閉会の挨拶があり、盛況のうちに二日間の日程を無事終了した。

(文責 田中久文)

理事会報告

平成十五年六月八日(日)正午より、京大会館第二一室において西田哲学会理事会が開催され、二十五人の理事の出席のもと、会発足後の会計報告がなされ、役員の選出即ち新理事・編集委員・会計監査の候補者が提案され承認されました。また特別会員についても五人の方が承認されました。具体的には、新理事 花岡永子氏(奈良産業大学)、水野友晴氏(大阪外国語大学)、大熊玄氏(西田幾多郎記念哲学館、ジェームズ・ハイジック氏(南山大学)

編集委員

岡田勝明氏(姫路獨協大学)、田中久文氏(日本大学)、米山 優氏(名古屋大学)

会計監査

長谷正當氏(大谷大学)、大橋容一郎氏(上智大学)

特別会員

梅原猛氏、本多正昭氏、小野寺功氏、八木誠一氏、グラーツィア・マルキアノ氏(シエナ大学)

また、西田哲学会の年次大会

の日程は、原則として、「七月の第四土曜日と翌日曜日」とすることに決定されました。
(文責 米山 優)

「西田哲学研究会」

へのお誘い

・西田哲学研究会「於京都」

本研究会は、西谷啓治先生の御存命中、先生に教えを受けながら、何よりもテキストを丹念にかつ厳密に読むことを通して、西田哲学を可能な限り深く大きな立場から理解しようという主旨から約三十年ほど前に発足したものです。以来今日まで、西谷先生亡き後は上田閑照先生の御指導・鞭撻を頂きながら、毎回読むテキストの範囲を三、四十ページに限定し、そこに呈示されている事柄を中心に議論を自由に交わすというかたちで、年四回のペースで中断することなく研究会を続けています。

次回の研究会は、二〇〇三年十二月二十日(土)午後一時四十分～五時、京大会館にて、テキスト『西田幾多郎全集』第十卷所収「二 自覚について」の「四と五」(五三三～五六四頁)を中心に行う予定です。関心のある方のご参加を歓迎致

します。

連絡先 築山修道

〒(〇七四八)八六一七五〇九

・西田哲学研究会「於東京」

本研究会は四年前に日本大学大学院総合社会情報研究科の院生およびOBを中心に発足したが、現在では、広く門戸を開放し、西田哲学に関心のある人であれば、その経歴を問わず、誰でも会員として受け入れている。毎月一回(原則として第四土曜日の午後二時から六時まで)研究発表会と読書会を開いているほか、会誌「場所」(年一回)を発行している。年内の研究会は十一月二十九日と十二月二十日を予定している。研究発表は会員が交互に順番を決めておこない、読書会の方は『善の研究』を輪読している。目下、第三編まで読了し、年内に第四編「宗教」を終える予定である。現在、会員は二十名弱であるが、北海道から九州まで広範囲にわたっている。

詳しくは左記へお問い合わせください。

西田哲学研究会事務局

〒107-0011 東京都杉並区荻窪

四二五一一一七〇一

nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

エッセイ

哲学と私

松山伸子

西田哲学会誕生の日、上田閑照先生が開会のご挨拶の中で「この場に参集したすべての人がそれぞれに何らかの問いを抱えて今日ここに在る」ということを感慨深くお話しされたことが、ずっと私の心に残っている。私は一体いつ頃から「哲学」という怪物に出会ったのだろうか。

宇ノ気の哲学講座には、平成八年の夏から今年で八回の参加を数える。これは学生時代の恩師山田敬子先生と久々のクラス会での縁が契機となって、私と西田哲学との出会いが生まれたのである。

その頃私は、平成三年に三男を十五歳で亡くして、翌春より慶應義塾大学の通信教育課程で哲学を学び始めていた。宇ノ気で沢山の先輩や仲間と知り合えたことで、卒業するまでの辛い道のりを完走できたと思っ

私の二十代は子産み子育てに明け暮れたのだが、唯一女の子に準備していたある名前はと

うとう三人目でも不用となり、三男には「凡」という字を使って凡樹(ヒロキ)と命名した。「平凡」の大切さ思ったことと、語呂合わせで長男から順に「衆生凡夫」と続くようにしたのも、今思えば、いつの間にか私が二十代に哲学と出会っていったということなのだろうか。そういうえば「十牛図」の十段階をテレビでメモしてとっておいた記憶もある。そしてずっと昔を思い出せば、小学校の頃「死」について大人の誰に聞いてもちゃんと答えてくれないことがとても不思議だったことを覚えている。

私にとって哲学とは、生まれる前からすでに私と出会い、私自身に寄り添っていたのかもしれない。

平凡に、と名付けた我がが私にそのことを気づかせてくれたような気がしている。

西田哲学と現代思想

コプフ・ゲレオン

即ちポストモダン思想・分析哲学者の中の多くの哲学者もそうである。そこで、西田哲学はどのように現代思想に貢献できるかについて考えてみよう。

西田幾多郎によると、二元論の問題は相違というより、本質という概念にある。何故なら西田は、対になるものは、例えば、内と外、一と多、及び一般者と個物のように、同一のものでなく、また異なるものでもなく、その代わりに、内即外、一即多、及び一般者即個物であると言う。換言すれば、通常、二元論において対立するものである内、外、一般者、及び個物などは自己を原因として自分自身によって存在し他者から影響を受けず永遠に変化もせず存在する。しかし西田はその見解を拒絶し、すべての現象は外や他者からによっていつでも変化するし、臨時の存在であると言う。そう考えると、西田が考えた世界は、相互に限定し限定されたりまた変化したりする個物から成ると言えるだろう。ポストモダン思想もその世界観を共有する。

周知のように、西田哲学は一貫して、デカルトとカントから受け継いだ二元論を覆したり、自己という概念を掘り崩したりすると言われている。現代哲学、

し、西田の世界観は少し異なる。彼がスピノザの一元論とライプニッツの多元論とを調和させるために発展させた「表現」という概念は多元論に寄与するのではないだろうか。「表現」という概念を使って、各々の個人また瞬間は世界の全体を表わすので、世界は一つでも多でもないと言える。そうであれば、諸民族・諸宗派・諸個人は個性をもつし、一般性を共有するので、その間にある相違点と類似点を認められる。従って、例えば東洋と西洋、京都学派とポストモダン派、及び西田思想と田辺思想には、差異もないし同一もないので、類似点もあるし相違点もあると言える。更に我々の使っている概念も相対的であるし、立場によると思われる。すると、西田哲学は、ポストモダン思想が既に言ったように、普通のカテゴリーを本質に現実化するとはできないのみならず、思想体系を理解する新しい解釈方法と、民族多元論、宗教間対話、及び個人も守る社会を支える議論になれると思うのである。

『西田哲学年報』 掲載論文の公募について

当学会の機関誌『西田哲学年報』に掲載する論文を募集しております。論文を投稿しようとする会員は、次の要領で応募してください。内容的には西田との関係に言及があれば、京都学派の他の哲学者あるいは西洋の哲学者などについての論考でも構いません。

1. 応募資格

本会B会員またはC会員であれば誰でも応募できます。

2. 応募方法

原稿は四百字詰め原稿用紙に換算して四十枚以内(文献・注を含む)が原則。四十枚を越える場合は、五十枚を限度として、その超過分の実費をいただきます。原稿五部と二百語程度の欧文要旨(英・独・仏のいずれか)五部を提出して下さい。原稿にも、氏名、ふりがな、可能ならば所属機関を明記して下さい。提出原稿は、可能な限りフロッピーディスクか電子メールで入稿することが望ましい。また、原稿ファイルは、ワープロ用のファイルとテキストファイルの

二種類で提出して下さい。ファイルと同時に、使用OSとソフト名を必ず知らせて下さい。

郵送の場合は、封筒の表に「公募論文原稿在中」と明記して下さい。

応募した原稿およびフロッピーディスクは返却しません。

3. 応募締切

随時提出することができます。(ただし、『西田哲学年報』第一号への掲載のためには二〇〇四年二月二十七日(金)必着です。)

4. 審査

編集委員会の責任において審査・選考します。審査の過程で問題点を応募者に指摘し、書き直しの要求をする場合があります。

5. 投稿の際には、下記の事項を明記した紙を添付して下さい。

1) 氏名(欧文氏名も)

2) 所属(〇〇大学文学部教授、〇〇大学大学院文学研究科大学院生などのように、詳細に記して下さい)

3) 論文名(欧文題名も)

4) 連絡先

・郵便物の送付先(自宅住所あるいは勤務先住所)

・電話やFAXによる連絡先(自宅あるいは勤務先)
・電子メールアドレス

6. 原稿の送り先および連絡先

〒九二九-1122

石川県河北郡宇ノ気町内日角

石川県西田幾多郎

記念哲学館内

西田哲学会事務局

TEL(〇七六)二八三六六〇〇

FAX(〇七六)二八三六三二〇

Webサイトの案内

西田哲学会のWebサイトは、海外在住の理事である有坂陽子氏のご尽力により次のURLに作成されております。ただし、まだ仮設中です。
<http://www.nishidaphilosophy.org/>

西田哲学会の規約(日本語)と第一回年次大会のプログラム(日本語・英語)が公開されており、今後、少しずつ充実させていく予定です。どうぞご覧下さい。

第二回年次大会について

第二回西田哲学会年次大会は、平成十六年七月二十四日(土)、

二十五日(日)に上智大学で開催されます。奮ってご参加下さい。第一回大会の時にアナウンスした字ノ気から変更になりましたのでご注意下さい。また、西田哲学会年次大会の日程は原則として「七月の第四土曜日と翌日曜日」とすることに決定されたことは理事会報告のところでも書きましたが、念のためここにも記しておくことにします。

演劇の案内

西田幾多郎に関する演劇「おーい幾多郎」が以下のように上演されます。

公演日：平成十六年三月三日(水) 〃七日(日)

場所：石川県金沢市大和町一丁目

金沢市民芸術村

脚本：池田むかう／演出：西川

信廣／舞台美術：朝倉撰

連絡先：金沢市民芸術村
TEL(〇七六)二六五八三〇〇

編集後記

西田哲学会会報の創刊号をお届けいたします。題字と巻頭言は、非常にお忙しい中、会長の上田閑照先生に書いていただきました。

西田哲学に興味を抱いて下さる層の広さに鑑みて、日本における学会組織としては珍しく学者ばかりでなく一般の方々にも会員になっていただくということになったこの西田哲学会に相応しい会報とはどのようなものなのか、まだ暗中模索という状態です。まずは会員にエッセーを書いていただくということになりました。今回エッセーを執筆していただいたお二人をご紹介します。A会員から福井県武生市の農家の主婦でいらっしやる松山伸子さん、そしてB会員からアメリカのルター・カレッジに御所属のコプフ・ゲレオンさん。ゲレオンさんは、日本学術振興会から研究費で、去年の九月から南山宗教学文化研究所で西田哲学に於ける「一即多」という概念を研究しておられます。僅か三名の編集委員の力では満足のいく会報とまらない可能性が大です。理事会からの意見なども参考にしつつ、さらに広く御意見を募ります。現在の編集委員長である私(米山)にE-Mailのご意見・ご批判をいただければ、幸いです [foneyama@sannet.ne.jp]。皆さんが「うーん、さか」かけて西田哲学に興味を抱かれたのかを調査してみたいという希望が編集委員にはあります。ご協力をお願いするかもしれませんが、どうぞよろしく。(編集委員長)